



花火満開まで62日

3月7日～8日の2日間、長野県諏訪市の「諏訪湖祭湖上花火大会」と、長野市の「長野えびす講煙火大会」事務局を訪問しました。先月号の「諏訪湖祭湖上花火大会」レポートに続き、今月号では「長野えびす講煙火大会」について取り上げます。

「長野えびす講煙火大会」は、明治32年に町の有志たちが商工業の発展を目的に西宮神社えびす講に合わせて打ち上げたのをはじまりに、昨年で117回目を数えた歴史ある花火大会です。会場は日本一長い川として知られる千曲川支流の犀川河川敷で、長野大橋と丹波島橋の間の河川敷です。犀川河川敷は長良川河川敷よりとても広く、諏訪湖と同様に10号玉を打ち上げることができます。その利点を生かし「全国十号玉新作花火コンテスト」が併催されています。名だたる煙火師達が技術の粋を結集して新作花火に挑み、毎年多くの観覧客を魅了させています。

今回は、大会事務局がある長野商工会議所の担当者にお会いし、花火大会の運営内容を種々聞かせていただきました。特に印象深いのは、時代にあわせた運営の合理化や効率化が図られている一方で、満足度の高い花火の演出を実現され、主催者として総合的な大会の運営体制を完成させていることでした。改めて「長野えびす講煙火大会」が花火評論家からも「一度はこのえびす講煙火大会を見ておかないと」と言われるほど質の高い歴史ある花火大会だということを実感しました。

他にも花火の演出手法や経費の削減、広報、交通対策、各種関係機関との連携など、細かいところ一つとっても大変勉強になり、昨年からはまった「ぎふ長良川花火大会」が今後継続していくためにも、ぜひ参考にしていきたい大会の一つでした。

ぎふ長良川花火大会は、今年で2回目の大会であり、「長野えびす講煙火大会」と比べてまだまだ歴史の浅い大会です。全国には数多くの参考になる先進事例がたくさんありますので、積極的に取り入れながらより良い花火大会を目指して行きたいと思います。